

【優秀賞】

コードスイッチング

日本人留学経験者と日本人留学未経験者と

英語母語話者との会話から

日比野 雅

岐阜大学地域科学部3年

要旨

コードスイッチングとは、バイリンガルの会話の中で起きる言語現象である。本稿では、バイリンガルとコードスイッチングの定義を見直し、言語学を中心に他分野での扱いも含め考察する。実際に録画・録音したデータからコードスイッチングの使用状況や理由を分析し、バイリンガルのコードスイッチングが会話にどのような効果を与えているのか分析する。

キーワード：バイリンガル，コードスイッチング，海外留学

1. はじめに

人間の言語習得は、人を取り巻く環境や状況によって大きく影響を受ける。その影響の表れ方は人や環境によって様々だが、中でも海外で生活している日本人バイリンガルは特に影響を受けやすい。例えば、日本人バイリンガルが現地で母語である日本語を話す際、日本語の文章をベースに第二言語を交えて話す傾向が多く、の先行研究で報告されている。これは、「コードスイッチング」と呼ばれており、バイリンガルによく起こる言語現象の一つとされているのだが、バイリンガルとコードスイッチングの定義は先行研究によって異なる。本稿では、バイリンガルとコードスイッチングがどのように定義されているか説明・考察し、インタビュー形式で収集したデータをもとに「留学経験の有無とコードスイッチングの関係性」について報告する。

2. 「バイリンガル」と「コードスイッチング」の定義

2-1. バイリンガルの定義

バイリンガルとは、一般的には「二つの言語を自由自在に使える人」を指すが、この定義はあくまで一般的な解釈であり、異なる観点から考察すると、定義にずれが生じる。例えば、習得度の観点からみたバイリンガルを、「二つの言語を流暢に母語のように使いこなせることができる人」(Bloomfield, 1933)と「他の言語で完全に意味ある発話をし始めた時」(Haugen, 1953)と定義している。つまり、前者は第二言語（以下 L2）の熟練者をバイリンガルとするのに対し、後者はL2の初心者でも場合によってはバイリンガルとする。また、このような定義は曖昧だとしたうえで吉川（2017）は、バイリンガルが獲得している二つの言語が完全に同じレベルにないことが、定義を曖昧にさせている理由の一つだと述べている。

このように、習得度の観点からみたバイリンガルの定義には大きな幅があり、バイリンガルの第一言語（以下 L1）と L2 のバランスが均等にならないことに原因がある。また、その傾きにも個人差があるため、「ある一定のレベルからバイリンガルと呼ぶ」と定めることが難しい。しかし、これらの先行研究から判明した共通点は、4技能すべてを踏まえてバイリンガルか判断しているのではなく、主に話者のスピーキングのレベルから判断している点である。このことから、本稿では習熟度に関係なく、留学などを理由に海外で生活した経験のある者をバイリンガルとする。

2-2. コードスイッチング

コードスイッチングとは、2種以上の言語体系ないし言語（方言など）の切り替えが行われることであり、バイリンガル特有の言語現象である。主に言語学分野で研究されてきたが、他分野の研究例も含め説明する。

2-2-1. 言語学におけるコードスイッチング

言語学分野におけるコードスイッチング研究には、言語の「切り替え」（コードスイッチング）と「混用」（コードミキシング）を区別するものと、区別しないものがある。

・区別する研究

Holmes（2008）は、話者が明確な動機を持ち、文脈や対話をする相手との関係を含めた使用理由で使う場合をコードスイッチングと呼び、そのような動機付けもなく乱雑に混ぜて使用することをコードミキシングと呼ぶと述べている。同様に Muysken（1995）は、スイッチングが現れる文の中での位置語の単位によって、タグスイッチング、コードミキシング、そしてコードスイッチングの三つに分け、文単位でのスイッチングのみをコードスイッチングとしている。

・区別しない研究

Grosjean（1982）は、コードスイッチングはどのような長さ（単語、句、文）においても

可能であり、もう一方の言語に完全に交替するものであるとする一方、借用は音韻的、形態的に、話されている言語に適応させた単語、または短い表現であると述べている。岡 (1995) は、コードスイッチングは発話者が使用する際に、文と文の切れ目、一つの文の中、いずれにも現れるものとしており、文と文の切れ目に表れるものを「文間コードスイッチング」と呼び、一つの文の中に現れるものを「文中コードスイッチング」と呼んでいるため、スイッチングの場所や単位にこだわらないと定義している。

このように、先行研究の中には両者を区別しているものと、区別していないものが存在しており、その区別の方法も研究者によって様々である。本稿では、Grosjean (1982) と岡 (1995) に倣い、コードスイッチングとコードミキシングを一貫してコードスイッチングと呼ぶこととする。

2-2-2. その他の学問におけるコードスイッチング

社会学の分野では Thomason (2001) が、ほとんどの社会が一つの言語で成り立っている「モノリンガル社会」であるとし、同時に二言語以上の言葉が同時に使われる言語環境を“language contact”と呼んでいる。その環境下で暮らすバイリンガルの言語使用に語彙の借用（コードスイッチング）が起き、音声学的、形態論的、統語論的、また語彙意味論的に影響を与えることがあると述べている。実際に筆者自身が海外で生活していた際、日本人の知り合いと日本語で会話をする機会があったが、自身や知り合いを含め、上述の通りほとんどの日本人が日本語の文章に L2 を交えながら会話をしていた。

心理学の分野では宮原 (2011)、Nishimura (1986)、そして Fotos (1995) の研究を例に挙げる。これらの研究では共通して、バイリンガルがコードスイッチングをすることで多くの心理的効果を発揮していると述べている。例えば、コードスイッチングをすることでバイリンガルは自らのアイデンティティ確立に役立てたり、接続詞をスイッチングすることで発話を強調し相手に注目させたり、談話のトピックを示したり、会話の内容を確認したり、話し手の感情を示すなど、その効果はさまざまである。さらに、宮原 (2011) はバイリンガルにとってコードスイッチングは最も相手に伝達しやすく、適切な表現ができるコミュニケーションストラテジーの一つであると述べている。会話の参加者間で使用がふさわしいと判断され、互いのコードスイッチング使用の是非が合致したときに使われるのである。また、コードスイッチングは特に親しい仲などのインフォーマルな会話で多く使われている傾向にある事も報告されている。

このように、コードスイッチングは学問によってさまざまな意見が述べられているのだが、海外で生活するバイリンガルが会話の中でコードスイッチングを起こす傾向にあり、コードスイッチングを通して様々な効果を発揮していることがわかった。しかし、バイリンガルが意識的にこの現象を起こしているのか、無意識に起こしているのかは明らかではない。

3. 留学経験の有無とコードスイッチングの関係性についての研究

本研究では、留学経験とコードスイッチングの関係性について研究をする。海外在住の留学生ではなく、帰国後の留学経験者に着目し調査を行った。先行研究の多くが海外在住中の被験者を対象にしているが、習得したL2がどのような形でコードスイッチングされるか興味を持ったため、日本に帰国して1年未満の日本人留学経験者を対象に調査を行った。比較検証するために、日本人留学未経験者と日本在住の英語母語話者の発話も調査した。コードスイッチングが起きるのがどのような状況か。以下の仮説をもとに検証した。

3-1. 仮説

仮説1：潜在意識，記憶によるコードスイッチング

留学経験者と留学未経験者が会話の中でコードスイッチングを起こす回数は、留学経験者が留学未経験者よりも多く起こすと推測する。留学経験者は現地でL2を使用して生活をした経験が潜在意識，または記憶として習得されていると考えたからである。ゆえに、留学中の経験が話題になり，L2母語話者が会話に加わるなどの刺激が与えられた場合，コードスイッチングを起こすと推測する。一方留学未経験者はそのような経験がないため，潜在意識に第二言語が定着していない可能性が高い。よって，コードスイッチングの回数は留学経験者よりも少ないと推測する。

仮説2：英語力によるコードスイッチング

英語力とコードスイッチングの回数が比例していると推測する。英語力が高ければ，留学経験の有無関係なく英語を引き出すことに慣れていていると考えたからである。しかし，この場合では，刺激を受けたときのみコードスイッチングをすると推測する。

仮説3：心理的サポートとしてのコードスイッチング

留学経験の有無や英語力には関係なく，話し手，聞き手の両者がコードスイッチング使用を認めているのであればコードスイッチングを起こすと推測する。一方が発話中に言葉が詰まってしまった場合，心理的なサポート行為（思いやり等）として聞き手がコードスイッチングを起こすケースがみられると推測する。例えば，話し手が英語母語話者で，聞き手が日本人の場合，英語母語話者が日本語の会話で「言葉が出てこない」と困った場合，聞き手はサポートとしてコードスイッチングするのではないかと推測する。

4. 研究方法：被験者・実験の流れ・データ分析

被験者は10代後半から20代前半の男女12名である。（男性2名，女性10名，平均23歳）5名は英語圏への海外留学を経験した日本人留学経験者（以下JE），5名は留学を経験したことがない日本人留学未経験者（以下JNE），そして，2名は日本在住の英語母語話者

(以下 E) である。親しい者同士のインフォーマルな会話にてコードスイッチングがみられることから(宮原, 2011) 顔見知りや友人同士の関係にある被験者を募集した。また, 英語母語話者は日本語で会話した。事前に実験の流れを説明した上で同意書に署名していただき, The Minimal English Test (MET, 牧秀樹, 和佐田裕昭, 橋本永貢子, 2003) を実施し英語力を測定した。

実験を①JE 同士, ②JE と E, ③JNE 同士, ④JNE と E, ⑤JE と JNE, ⑥JE と JNE と E, の6パターンに構成し, ①~⑥での JE と, JNE のコードスイッチングの回数を数えた。先行研究では, 被験者の会話を録音した音声データや, 対面で会話をしている現場に実験実施者が出向いてデータを収集しているが, 本研究では感染症対策のため, クラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービスを使用し, 遠隔での会話を録画・録音をした。実施時間は1セッションにつき30分である。22セッションが実施され, 録画・録音時間は合計11時間である。

5. 結果

MET による英語力測定では, 留学経験者と留学未経験者の間に差がみられた。留学経験者は60点満点中, 平均で51点獲得し, 留学未経験者は平均32.4点獲得した。この結果から, 日本人留学経験者の英語力が高いことが明らかになった。すべてのセッションを通じて測定されたコードスイッチングの回数は表1の通りである。

表1

セッショングループ	参加者	回数	
① JE	日本人留学経験者	10回	← -3回
② JE - E	日本人留学経験者+英語母語話者	7回	
③ JNE	日本人留学未経験者	2回	← +8回
④ JNE - E	日本人留学未経験者 + 英語母語話者	10回	
⑤ JE - JNE	日本人留学経験者 + 日本人留学未経験者	15回	← +11回
⑥ JE - JNE - E	日本人留学経験者 + 日本人留学未経験者+英語母語話者	26回	

①JE と②JE - E のセッションについて

①JE のセッションでは合計10回のコードスイッチングを確認した。その中で単語単位のスイッチングは9回, 節単位のスイッチングは1回だった。対して②JE - E のセッションでは合計7回のコードスイッチングを確認し, JE のセッションに比べて3回減った。その中で単語単位のスイッチングは4回, 節単位のスイッチングは3回だった。この結果から仮説1は否定されたのだが, 節単位のコードスイッチングに注目すると, E が参加したことにより, 一回のコードスイッチングの長さが長くなった。①JE のセッションでは, 海外での

思い出話を話す際に最も多くのコードスイッチングを確認し、②JE-Eのセッションでは、EがJEの被験者に対して聞き取れなかった部分を聞き返す際に最も長いコードスイッチングを確認した。以下に実際の会話とコードスイッチングの回数をグラフ1に示す。

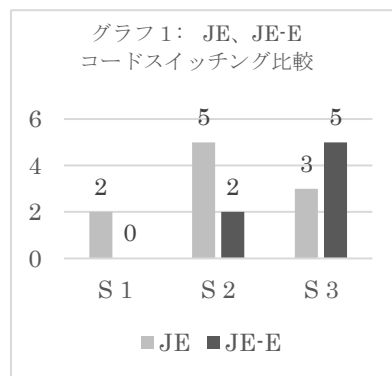
例：

E：あー，中学生。ええ，中学生？

JE：はい，中学二年生です。

E：中，中学，二年生。え，それ，Junior High School？

JE：Yea, I'm 8th grader.



③JNEと④JNE-Eのセッションについて

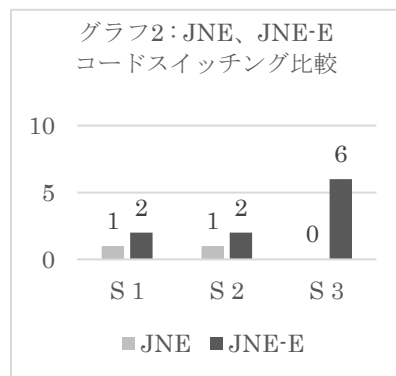
③JNEのセッションでは合計2回のコードスイッチングを確認した。その中で単語単位のスイッチングは2回，節単位のスイッチングは0回だった。対して④JNE-Eのセッションでは合計10回のコードスイッチングを確認し，③JNEのセッションに比べて10回増えた。その中で単語単位のスイッチングは7回，節単位のスイッチングは3回だった。④JNE-Eのセッションで，JNEが主にコードスイッチングをしたのは，セッション①でのJEと同様，Eが聞き取れなかった部分を聞き返す際に日本語から英語に言い換えて相手に伝えていた。また，Eが日本語での言い方がわからず困っていた場面では，JNE全員がその場で携帯の翻訳機能を使い，英単語を日本語に翻訳していた。それ以降，一度翻訳した単語が登場する文章ではその単語を繰り返しコードスイッチングしていた。この結果から仮説1が再度否定されたが，JEのグループにEが加わった時よりも，JNEのグループにEが加わった時の方が大幅な変化がみられたことは想定外の結果だった。そして，この実験で仮説3を立証することができた。以下に実際の会話とコードスイッチングの回数をグラフ2に示す。

例：

JNE：痩せていますね。

E：やせ…。すみませんもう一度お願いします。

JNE：痩せている。Skinny, you are so skinny.



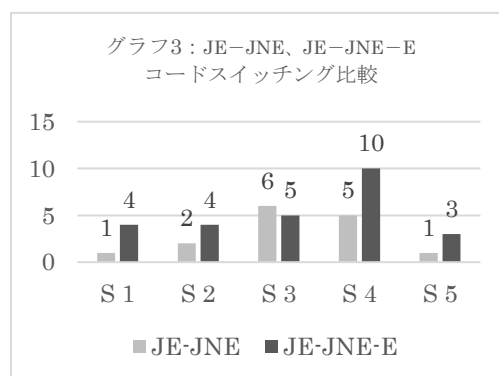
⑤JE - JNE と ⑥JE - JNE - E のセッションについて

⑤JE - JNE のセッションでは合計 16 回のコードスイッチングを確認した。その中で単語単位のスイッチングは 11 回、節単位のスイッチングは 5 回だった。対して⑥の JE - JNE - E のセッションでは合計 26 回のコードスイッチングを確認し、⑤の JE - JNE のセッションに比べて 15 回増えた。その中で単語単位のスイッチングは 26 回、節単位のスイッチングは 0 回だった。以下に実際の会話とコードスイッチングの回数をグラフ 3 に示す。

例：

JNE：アメリカの主な天災って何？

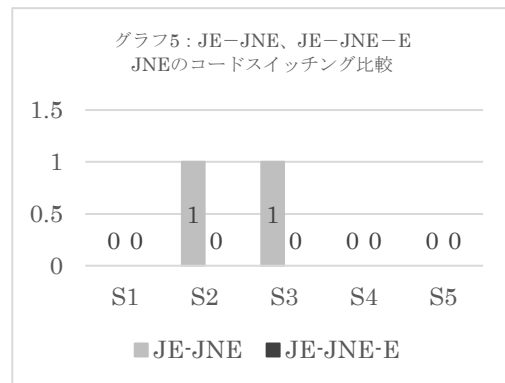
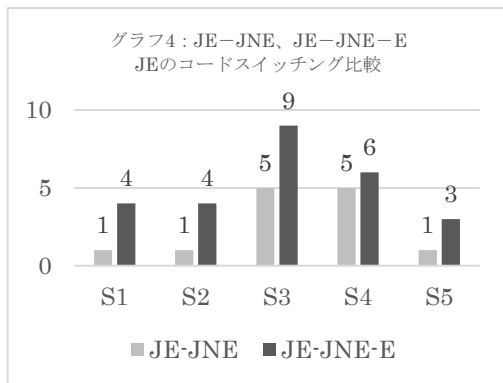
JE：こっちはハリケーン…日本でいう台風みたいな。



・ JE と JNE の比較

各セッションにおける JE と JNE のコードスイッチングの回数をグラフ 4 に示す。⑤ JE - JNE のセッションにて、JE がコードスイッチングした回数は、13 回で、JNE は 2 回だった。対して、⑥ JE - JNE - E のセッションでは、JE は 26 回で、JNE は 0 回だった。⑤ JE - JNE のセッションでは、JE が海外での生活について JNE に説明をする際に、一度英語で言いかけた言葉を日本語に直して再度説明したり、海外での天候を説明する際に現地特有の気候を英語で一度話した後に日本語で最も意味が近い単語を用いて説明するなど、JE 側が JNE 側に言語を寄せていく現象を確認した。そして、JE - JNE - E のセッションでの JE はうなずきやリアクションなど、非言語の英語特有の行為を行っていたことから、JE 側が E 側に言語を寄せていく現象を確認した。この結果から仮説 3 が立証されたのだが、予想していなかったのは JE が対話相手に合わせて日本語と、英語のどちらにも合わせていった現象がみられたことだった。一方、JNE は ⑤JE - JNE のセッションで行ったコードスイッチングが少ない回数であったものの、一つのコードスイッチングが長かった。例えば、海外や英語の授業で誰かから英語で質問された際に回答に困るといった内容を話した際に、その質問文を英文で話していた。また、⑥JE - JNE - E のセッションでの JNE は、E の話している内容に対して英語で反応していた。以下に JE と JNE のコードスイッチ

グの回数をグラフ4と5に示す。



6. まとめ

仮説1: 潜在意識・記憶によるコードスイッチング

コードスイッチングの合計回数 (JE: 56回, JNE: 15回) から考えると立証されたといえるが, JE 同士, と JE・E, そして JNE 同士, と JNE・E のミーティングの結果から, いくつかの時でも JE の方がコードスイッチングを多く起こすという結果にはならなかったため, この説は立証されなかった。

仮説2: 英語力によるコードスイッチング

MET で JE の方が JNE よりも英語力が上であることが証明され, JE は E がセッションに参加したことによりコードスイッチングの回数が増えていることが多くのデータでもみられることから, この説は立証されたといえる。しかし, JNE と, JNE・E のセッションでも数の変化がみられたことから, 完全に立証されたとは言えない。

仮説3: 心理的サポートとしてのコードスイッチング

すべてのセッションにおいてサポートが確認されたことから, この説は完全に立証されたと言える。また, JE は E に対してだけでなく, JNE にも言語を合わせていく様子がみられたことから, JE は思いやりの心をもったうえでコードスイッチングを行っている可能性がある。そして, JNE に関しても英語力に関係なくコードスイッチングを行っていることから, 人間は自分が知らない言語に対して受け入れる気持ちがあれば, 留学経験の有無関係なく誰でもコードスイッチングをする可能性も出てきた。

7. さいごに

今回の実験を通して様々な現象をみることができた。そして, コードスイッチングは自分

が思っていたよりも遥かに複雑で、数字だけでは理解することができない心理的影響を話者に与えていると感じた。人間の言語習得は、人を取り巻く環境や状況によって大きく影響を受けるが、それだけでなく、L2 に対して受け入れる姿勢や相手とのコミュニケーションを望む姿勢があれば影響を受けるのかもしれない。現段階ではデータ数が少ないため、明確に仮説を立証することが難しかったが、今後もコードスイッチングの研究を続け、さらに多くの現象を観察していこうと思う。

【参考文献】

- 岡秀夫 「コード・スイッチングをめぐる諸問題」, 『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』
溪水社, 1995 年
- 藤村香予 「二言語話者の談話における「コードスイッチング」・「コードミキシング」の必要性
—英国に住む日本人の場合—」 『安田女子大学紀要』 第 41 号 2013 年。
- 宮原温子 「日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチング —機能的分析を中心に
—」 『目白大学 人文学研究』 第 7 号 2011 年。
- 吉川敏博 「バイリンガル脳の二つの言語」 『天理大学学報』 第 68 巻 第 2 号 2017 年。

- Appel and Muysken. (1987). *Language Contact and Bilingualism*. London: Edward Arnold.
- Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York: Holt.
- Fotos, S. (1995). Japanese-English Conversational Codeswitching in Balanced and Limited Proficiency Bilinguals. *The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 1, 1-16.
- Grosjean, G. (1982). *Life With Two Languages*. MA: Harvard University Express.
- Thomason, S. G. (2001). *Language Contact*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Haugen, E. (1953). *The Norwegian Language in America: A Study in Bilingual Behavior*. Philadelphia University of Pennsylvania Press
- Holmes, J. (2008). *Introduction to Sociolinguistics*, 3rd Edition. Essex: Longman
- Nishimura, M. (1986). Intrasentential Codeswitching: The Case of Language Assignment. In Vaid, J. (ed.) *Language Processing in Bilinguals*. London: Lawrence Erlbaum.